

北朝鮮の「拒否・欺瞞（D&D）」工作～弾道ミサイル及び核開発からの視点～
—企画部企画調整課（兼）理論研究部社会・経済研究室 教官 須江 秀司

NIDSコメンタリー

第30号 2013年1月29日

はじめに

北朝鮮は2012年12月12日、朝鮮半島西部の東倉里にある西海衛星発射場から衛星打ち上げロケット「銀河3号」を打ち上げ、人工衛星「光明星3号」を軌道に乗せることに成功した。多段化した事実上のミサイル打ち上げを開始した1998年のテポドン1号発射以来、初めての成功である。しかしながら、北朝鮮側が発射に先だてとった一連の行動によって、外部から発射時期を見極めることが難しくなった模様である。

このように、外部からの観察を困難にさせる活動は「拒否・欺瞞（Denial and Deception: D&D）」と呼ばれており、情報収集・分析を行う上での課題である。本稿では、銀河3号発射に関係した北朝鮮の動きを概観した上で、同国のD&Dについて検討したい。

銀河3号発射を巡る情報の混乱

北朝鮮の平壤放送は12月1日、同月10日から22日までの間に、上述した衛星打ち上げロケットを発射すると発表した。その後、韓国政府筋を主な情報源として、各種のメディアが、ロケットの1段目が設置（3日）、2段目が設置（5日）、そして3段目の設置も進行中であることを5日に報じている。

この後、9日の平壤放送は、打ち上げ準備の最終段階の過程で「一連の事情」が生じたことから、衛星打ち上げ時期の変更を検討していることを発表した。発射予告の初日であった10日には、朝鮮中央通信が、エンジンに技術的欠陥が見つかったとして、打ち上げ予定日を12月29日まで延長することを伝えた。

これを受けたかのように、再び韓国政府筋から得られた情報として、北朝鮮が修理を行うためロケットを

解体し発射台から降ろしていることが、複数のメディアを通じて12日に伝わった。

銀河3号はこのような情報が飛び交う中で打ち上げられたのであり、突然の発射とこれまでの情報との整合性に疑問を感じた人も多いに違いない。独誌『シュピーゲル（Spiegel）』は、このような混乱について「北朝鮮に関する西側の無知が露呈された」と厳しい評価をしているが、この問題については主に2つの見方が可能であろう。

1点目は、打ち上げ後、韓国の金寛鎮国防部長官が国会国防委員会で発言した内容が参考となる。韓国『中央日報』における同長官の発言をまとめると、韓国政府は米国と連携しリアルタイムで情報を得ており、ロケット解体という当初の判断とは異なり、ロケットが打ち上げ台に設置されたことを確認していた模様である。しかし、情報の性格上、内外のメディアへリークされた内容についてはノーコメントを貫いたということである。つまり、メディア等を通じて一般的に得られる情報と、情報当局が把握している機微な情報は質・量とも異なるため、今回の発射の準備状況については、一部の情報関係者、政府関係者、各国指導者等にとっては予測の範囲であったという見方である。また、森本敏防衛大臣（当時）は12月20日放送のテレビ番組の中で、銀河3号を解体したという情報について防衛省はどのように状況を把握していたのかという質問に対し、細かいことは述べられないが12月10日以降はいつ発射してもよいという態勢であったと答えている。

2点目は、北朝鮮が発射のタイミングについて錯乱を狙ったものであるという視点である。韓国国防部は12月13日に行った記者会見でもこの点に言及した模

様で、英誌『ジェーンズ・ディフェンス・ウィークリー (Jane's Defence Weekly)』も、2009 年や 2012 年 4 月の打ち上げと比較した上で、発射の隠密性が増し、北朝鮮がかく乱を狙ったものであると分析している。

北朝鮮と D&D

一般的に、情報収集は、発信側（この場合、北朝鮮）の D&D と呼ばれる工作に対して脆弱となる傾向がある。D&D を簡単に説明すると、「拒否 (Denial)」とは、敵側の情報収集能力を知ることにより、それに対してカモフラージュ等によって情報にアクセスすることを制限することである。「欺瞞 (Deception)」とは、発信する情報の内容を操作することによって、情報収集側の分析者及びユーザーの考えをコントロールすることである。北朝鮮のように、外部から情報収集を行うことが困難な場合には D&D の効果は高まる。

今回のミサイル取り外しの情報のきっかけとなったとみられる画像情報 (IMINT) も当然、D&D の対象となる。伝えられているように、銀河 3 号を幕で覆いロケット本体を隠したりすることや、打ち上げに際し報道陣を招待しない行為は「拒否」にあたるであろう。一方、「欺瞞」とみられる活動について、『中央日報』によると、打ち上げ直前までクレーンを動かし修理をしているように見せかけたことが、韓国情報当局者の分析に影響を与えた模様である。このため「解体のための作業なのか打ち上げ準備なのか判断がはっきりしなかった」と同当局者は述べている。

また、このような欺瞞工作が効果を発揮するためには一定の真実が含まれていることが条件であると、情報の専門家は指摘する。この観点からすると、北朝鮮が発射期間を延長すると発表したことは重要な意味を持つだろう。北朝鮮は前回 4 月の打ち上げに失敗していることから、今回の打ち上げには当然慎重になっていたと考えられる。このため、技術的欠陥によって発射を延期するという北朝鮮の発表は、真実に近い情報であると評価される可能性が高いであろう。

IMINT に対する D&D (特に、「欺瞞」) を示す例の一つとして、インドが 1998 年に実施した核実験をあげることができるであろう。米国は偵察衛星によりインドが核実験場を整備していることを数年前から探知しており、外交ルートを通じて核実験を行わないようにインド政府に要請した。このことから、インドは

米国がどのような手段によって何を監視しているのかについてヒントを得たとされる。インドがとった手段は、核実験場における多様な活動を増加させ、核実験に向けた最終的な動きが特定されないようにカモフラージュすることであった。

北朝鮮は過去にも D&D と考えられる活動を行っている。例えば、同国が 2006 年に実施した第 1 回目の核実験では約 6kg のプルトニウムを使ったと米国には伝えたようだが、六者会合での合意に従って中国へ提出した核申告書の中では 2kg と少なく申告した模様である。核爆発が一定の出力を達成するのに必要な核分裂性物質 (プルトニウム又は高濃縮ウラン (HEU)) の量は少ない程、核兵器製造レベルが高いと考えられている。

このため、このような下方修正を行った理由として、北朝鮮がより高度な核兵器 (例えば、小型化した核兵器) の製造技術を保有していることを示したかった可能性も考えられる。つまり、最初の核実験の出力が 1 キロトン以下と、予想された出力に比べはるかに小規模であったため、技術的欠陥を取り繕うための情報工作だったということである。北朝鮮の核技術について得られる情報が制限される中で、容易に入手できる情報は D&D の格好的となるだろう。

予想される北朝鮮の D&D と対処

銀河 3 号の発射に続き、北朝鮮が 3 回目の核実験を行う可能性が指摘されており、同国が取り得る D&D には注意する必要があるだろう。例えば、核実験でプルトニウム又は HEU を利用するのは注目される点の一つである。北朝鮮の HEU 製造に関する具体的な情報は明らかになっていないが、ウラン濃縮施設が存在することは、寧辺の施設に米国人科学者が訪問したことで判明している。このような中、別の秘密施設で HEU 製造を進めている可能性を指摘する識者も多いが、その実態は不明である。北朝鮮は、今後行う予定の核実験が「高い水準」であることを示唆している。例えば、この発言に対する評価も、2010 年に同国が「核融合に成功した」と発表したことを前提にした場合には重要な意味を持つ。プルトニウムや HEU に核融合物質を混入することで出力を強化したブースト型等の核実験を行う可能性も排除できず、出力が大幅に強化されるからである。

北朝鮮の核実験場に対する現地査察の見通しがつかない中で、現時点で核実験を確認する方法としては、地表から大気中に漏れ出る放射性希ガス（デブリ）の採集が重要となる。2006年に北朝鮮が実施した第1回目の地下核実験後には、周辺の空域等で放射性希ガスの一種であるキセノンが探知されたことで、核実験が行われたことが確認された。しかしながら、2009年の第2回目の実験後にはキセノンは収集できていない。

デブリの分析は核爆発にどのような核分裂性物質が利用されたのかを評価する上で重要な手段であると考えられている。例えば、Jeffrey T. Richelson著『Spying on the Bomb』（W. W. Norton & Company、2007年）によると、1964年に中国が初の核実験を行った際、米国は当初、中国がプルトニウムを使って核実験を行ったと考えていたようである。ところが、その後、米国の情報収集機によって中国近辺の空域で収集されたデブリを分析した結果、それがウラニウムを使った核兵器であったことが判明した。

問題は、大気中での核実験とは異なり地下核実験によって放出されるデブリの収集が難しいことである。このように、核兵器の製造能力に関する情報収集の手段が制限される中、北朝鮮が核実験に前後して行う発表は慎重に分析する必要があるだろう。同国が技術的

飛躍を目的とした宣伝を行う可能性も考えられるからである。

D&Dに対処するためには、情報収集及び分析過程での対策が必要となる。収集の面では、特に情報収集に関する新たな技術や手段の確保も重要である。その意味で韓国が米国の無人偵察機「グローバルホーク」を購入することは、改善策の一步となろう。同偵察機は、高度約2万メートルから約30センチのものを見分ける能力を持つほか、電子情報等の収集も行える。また、滞空時間も長いことから、情報収集のターゲットを長時間監視することも可能となるだろう。

分析の過程においては、北朝鮮のD&Dの能力を把握することが必須である。更に、情報収集の手段がどれだけ限定されているかについても認識し、それらの手段がどのようなD&Dに脆弱なのかを知るべきであろう。得られる情報が不足することにより、分析者は複数の仮説を設定する必要があるだろうが、バイアス等により影響を受けがちである。従って、これらの仮説をどのように検証するかによって、「奇襲(サプライズ)」に対する備えが異なってくるのである。

(2013年1月24日脱稿)

プロフィール

profile

企画部企画調整課(兼)理論研究部
社会・経済研究室 教官 須江 秀司

専門分野：
軍備管理・軍縮・不拡散、オープンソース
スインテリジェンス

本欄における見解は防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断引用はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通 : 03-3713-5912

代 表 : 03-5721-7005 (内線 6584, 6258)

FAX : 03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.go.jp>